

労苦は無駄ではない

コリント人への手紙第一 15章 50-58節

はじめに

私が月の第二週に説教をさせていただく時は、「コリント人への手紙第一」からお話しています。コリント人への手紙第一の15章は「死者の復活」がテーマになっています。

しかしコリント教会の中には、「死者の復活はない」と考える人たちがいたようです。この人たちは、イエス様は確かに死からよみがえられたけれども、イエス様を信じるクリスチャンは死からよみがえることはないと考えたのです。

私たちはどうでしょうか。私たちの多くは、イエス様が死からよみがえり復活されたことを信じていると思いますが、イエス様を信じる私たちクリスチャンも、やがてイエス様がこの地上に来られる終わりの時に、死からよみがえり復活すると信じているでしょうか。

私たちは「使徒信条」の中で、「罪の赦し、身体によみがえり、とこしえのいのちを信ず」と告白していますが、それは、イエス様がこの地上に再び来られる終わりの時に、私たちの「身体」も死からよみがえり復活することを意味しています。つまり、イエス様を信じるクリスチャンの「身体によみがえり」は、キリスト教信仰の基本的な内容なのです。

今日の聖書箇所で、「死者の復活」についての話は終わりとなりますが、パウロはここで、なぜ死者は復活しなければならないのか、また「死者の復活」を信じることの意義について語っています。

1. 神の国を相続するには

50節を見てみましょう。「**兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません**」。なぜ死者は復活しなければならないのか、その一つの理由は、「神の国」が「朽ちないもの」だからです。イエス様がこの地上に来られた二千年前から、この地上に「神の国」がもたらされました。「神の国」とは、「神の支配」のことです。そして、この「神の国」「神の支配」はこれまで、イエス様を信じるクリスチャンたちを通して、また教会を通して、この地上に進展し、広げられて来ました。そして、この「神の国」「神の支配」は、イエス様がこの地上に再び来られる終わりの時に完成し、永遠に続いていくのです。それゆえ「神の国」は、「朽ちないもの」となるのです。そして、イエス様を信じる私たちクリスチャンは、その「神の国」で、神様の栄光を現わし、永遠に神様を喜んで生きるのです。

しかし、その「神の国」においては、私たちが今持っている「血肉のからだ」では生きることができないのです。なぜなら、私たちが今持っている「血肉のからだ」は「朽ちるもの」

だからです。「朽ちないもの」である「神の国」で永遠に生きるためには、「朽ちないからだ」を持たなければならないのです。

では私たちは、どのように「朽ちないからだ」を持つことができるのでしょうか。私たちが「朽ちないからだ」を持つ時は、イエス様がこの地上に再び来られる終わりの時です。51-52節を見てみましょう。「**聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。**」

イエス様がこの地上に再び来られる時に、「終わりのラッパ」が鳴ります。ラッパは、旧約聖書においては、神の民を集める集合の合図であり、戦いと勝利の合図でした。終わりのラッパが鳴る時、イエス様を信じるクリスチャンたちが一つに集められます。その時、イエス様を信じる死者たちは、「朽ちないからだ」によみがえり、生きている者たちは、「朽ちないからだ」に変えられるのです。イエス様がこの地上に再び来られる終わりの時は、いつ来るか分かりません。その時は、盗人のように来るのです。ですからその時には、生きている者も死んでいる者もいるのです。私たちもその時に、生きているか死んでいるか分かりません。私たちが死んでいたなら、「朽ちないからだ」によみがえり、私たちが生きていたなら、「朽ちないからだ」に変えられるのです。しかもそれは、「たちまち、一瞬のうちに」起こります。長い時間かけて徐々によみがえったり、変えられたりするのではなく、「たちまち、一瞬のうちに」よみがえり、変えられるのです。こうして、私たち人間の最大の敵である「死」が滅ぼされ、「死」に対する勝利のラッパが鳴り響くのです。

2. 主イエス・キリストによって与えられる勝利

「死」に対する勝利、それは旧約聖書に預言されていることでした。54-55節に、二つの御言葉が引用されています。54節の「**死は勝利に呑み込まれた**」はイザヤ25:8からの引用で、55節の「**死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか**」はホセア13:14からの引用です。

聖書は、「死」は人間に本来的にあったものではなく、アダムとエバが罪を犯した結果、全人類は死ぬべき存在となったと教えています。パウロもローマ6:23で、「**罪の報酬は死です**」と語っている通り、人間の罪に対する報いとして、死が人間を支配するようになったのです。人間に対する死の支配は、絶対的なものです。誰もこの死の支配から逃れることはできません。どんな力もこの死に打ち勝つことはできません。どんな経済力も、どんな医療の力も、この死に打ち勝つことはできません。私たち人間は、死に対して全く無力です。どんなに人生の中で、富や名声や幸福を手に入れたとしても、死が一瞬にしてそれらを呑み込んでしまうのです。死は絶えず私たち人間に、暗い影を落とします。それゆえ私たちは、できる限り死を遠ざけて生きる他なかったのです。

しかし57節には、「**神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました**」とあります。神様は、イエス様によって、私たちをこれまで絶対的に

支配してきた「死」に対する勝利を与えてくださったのです。

56節には、「**死のとげは罪であり、罪の力は律法です**」とあります。「とげ」は、私たちに痛みをもたらします。「死」は、罪があるゆえに、私たちに痛みをもたらすのです。では罪とは何でしょうか。罪は、神様の律法に従わないことです。神様の律法は、「十戒」の中に要約して書かれていますが、その中心は神様を愛し、隣人を愛することです。その意味で、神様を愛さないこと、隣人を愛さないことを「罪」と呼ぶのです。私たちは、神様の律法によって、「罪」を知ります。そしてその神様を愛さず、隣人を愛さない「罪」が、私たちに「死」をもたらすのです。

「死」は、罪があるゆえに、私たちに痛みをもたらし、暗い影を落とします。しかし「死」は、罪が解決されれば、「とげ」ではなくなるのです。イエス様は、この「死のとげ」である「罪」を、十字架において解決されたのです。イエス様は、その生涯において、神様を完全に愛し、隣人を完全に愛して神様の律法を守り通されました。その神様への愛と隣人の愛が最も鮮やかに示されたのは、十字架の死においてです。イエス様は十字架の死において、私たちの罪の償いをされました。私たちの代わりに、十字架で神様の裁きと呪いを受けられたのです。そのことによって、イエス様を信じる私たちの罪の問題をすべて解決されたのです。そしてイエス様は、十字架の死から三日目に、死からよみがえり復活し、死に打ち勝たれたのです。

イエス様を信じる私たちは、イエス様の十字架の死によって、すべての罪が赦されました。そして、イエス様の復活によって、死に対する勝利を与えられたのです。イエス様を信じる私たちは、すべての罪が赦されます。それゆえ私たちには、「死のとげ」がなくなったのです。「死」は、私たちに痛みをもたらし、暗い影を落とすだけのものではなくなったのです。私たちにとって「死」は、「とげ」ではなく、「天国の入口」となったのです。それゆえパウロは、ピリピ人への手紙でこのように言っています。「**私にとって生きることはキリスト、死ぬことも益です**」(ピリピ 1:21)「**私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです**」(ピリピ 1:23)。

イエス様を信じる私たちにとっては、「死」の意味が代わります。「死」は、「とげ」ではなく「天国の入口」となり、「遠ざけるもの」から「待ち望むもの」となったのです。これが、私たちにとっての死に対する「勝利」の第一のものです。そしてイエス様がこの地上に再び来られる終わりの時に、私たちの「血肉のからだ」が「朽ちないもの」によみがえり、変えられる時、その時に死は完全に滅ぼされるのです。ここにおいてこそ、「終わりのラッパ」が鳴り響き、死に対する完全な勝利が宣言されるのです。

死者はなぜ復活しなければならないのか、それは、「朽ちない神の国」で永遠に生きるためであり、死が完全に滅ぼされるためです。もし「死者の復活」がなければ、私たちは、「神の国」で永遠に生きることができないし、死に対しても敗北したままになってしまうのです。

3. 労苦は無駄ではない

58節を見てみましょう。「**ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、い**

つも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあつて無駄でないことを知っているのですから。 私たちが今持っている「血肉のからだ」は、やがて「朽ちるもの」です。そして「神の国」は、「朽ちないもの」です。私たちの地上の生涯は、「朽ちるもの」のために生きていくのではなく、「朽ちないもの」のために生きていくべきです。永遠に続くもののために生きていくべきであり、「神の国」のために生きていくべきです。

「神の国」のために生きていくとは、「主のわざ」に励むことです。「主のわざ」とは、神様に聞き従うことであり、神様からの使命に生きることです。「主のわざ」に励む労苦は、決して無駄にはならないと言われていました。「主のわざ」には、必ず報いがあるのです。イエス様がこの地上に再び来られる時に、イエス様からの報いが与えられるのです。私たちは、地上の生涯において、完全に罪を拭い切れないものです。それゆえどんなに「主のわざ」に励んでも、そこに罪が纏わりついているのです。しかしそうであっても、イエス様の十字架によって罪を完全に解決された私たちは、たとえ完全な「主のわざ」でなくても、たとえ罪にまみれた「主のわざ」であっても、イエス様の血潮によって洗い清め、私たちの「主のわざ」を受け入れ、それに報いを与えてくださるのです。

パウロは、「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい」と言います。私たちは、人からの報いを期待して生きる時に、ぐらぐらと動いてしまいます。人は私たちの労苦に必ず報いてくれるわけではありません。人は目に見えるものだけを評価し、世間は結果で評価します。しかしイエス様は違います。イエス様は、すべてを見ておられます。目に見えるものだけでなく、目に見えないものを見ておられます。また結果だけでなく、そのプロセスを見ておられます。イエス様のために行なったすべてのことは、何一つ無駄になることはないのです。結果が出なかったこと、失敗に終わったことも、すべてのイエス様のために行なったことは、必ず報いられるのです。ですから、私たちが教会で行うすべての奉仕も、一つとして無駄になることなく、必ず報いを与えられるのです。

おわりに

イエス様がこの地上に再び来られる終わりの時に、死が完全に滅ぼされ、私たちの「主のわざ」に対する労苦が報いられます。「神の国」では、「朽ちないからだ」で神様の栄光を現わし、永遠に神様を喜びます。それが、イエス様を信じる私たちに約束されている未来です。

そうであるならば、私たちはこの地上の残された生涯をどのように生きるでしょうか。私たちに求められていることは、「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励むこと」です。私たちは、「朽ちるもの」のために生きるのではなく、「朽ちないもの」のために生きていかなければなりません。「朽ちないもの」のために生きていく時、すべての労苦は決して無駄にはならないのです。必ず報いられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちにとって最大の敵は、死でした。死は私たちの前に立ちほだかり、私たちはただ敗

北するほかありませんでした。しかしイエス様は、私たちの「死のとげ」を取り去り、「死」に希望を与えてくださいました。私たちにとって、痛みであり悲しみでしかなかった「死」に、新しい意味、「天国の入口」を与えてくださいましたことを感謝します。そこには、イエス様の十字架と死の御業があったことを思われます。

どうか私たちが、死を乗り越え、死に対する勝利の希望を抱いて、いつも「主のわざ」に励むことができますように。私たちの一つ一つの労苦に、主がやがて必ず報いてくださることを信じさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。